

第四百十六回 青葉会

令和二年十二月二十四日 WEB句会

選者 川口孤舟

投句・選句 伊賀山そらお 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 小早健介

在間千恵 佐藤ただしげ 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫 長谷見びん

福島正明 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 安部眞希子 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 松崎浩 山本三恵

《互選句》 ○は特選 ○は孤舟選者の選

十二点 ◎五グラムの宇宙土産や冬銀河

・・・リユウグウの土砂採取の報に・ 啓子(○眞・紀・忠・孤・五・○堂・正・○昇・び

○天・盛・け)

九点 数え日の突堤に暮れ竿仕舞

びん(紀・五・恵・堂・ゆ・正・啓・亜・盛)

七点 寒禽の餌ねだりをる声の鋭(と)し 紀久男(眞・忠・五・ゆ・雅・啓・三)

◎マスクして目は口ほどに物を言ふ 昇(孤・健・千・雅・規・天・亜)

五点 ところと池に溶けゆく浮寝鳥 孤舟(紀・○弘・ゆ・昇・け)

短か日や若い先短きこともふと 恵洲(紀・そ・堂・規・び)

行く年やコロナの先のうす明り ゆたか(○忠・孤・た・雅・昇)

理由無き楽観主義や浮寝鳥 正明(紀・そ・孤・健・○規)

◎古稀の帯また締めぬまま年暮るる 啓子(紀・○孤・○た・正・○亜)

籠り居や友の電話に救はるる 天牛(紀・○そ・千・龍・昇)

◎下京にかくれ家ありき春星忌 亜也(紀・孤・五・啓・浩)

四点 機嫌よき妻の鼻唄イヨマンテ(熊祭) 紀久男(恵・堂・天・盛)

枝折戸の半ば開きて冬椿 孤舟(五・た・啓・三)

続けよか思案時かな年賀状 千恵(紀・忠・龍・浩)

煩惱の浮き沈み見ゆ柚子湯かな 盛雄(紀・龍・堂・ゆ)

菌奔り老ひの巢ごもり寒すずめ 雅夫(紀・昇・び・三)

今年またオンリー・ワンの聖夜かな 規雄(紀・忠・○龍・隆)

三点 喪の主へ賀状書けずにただ黙禱 忠彦(紀・そ・○健)

年賀状牛の貌まで付記を書き 全(紀・恵・雅)

ワクチンの優先者となり年暮れる 全(紀・眞・弘)

密なれど笑ひに行きたし師走寄席 全(紀・そ・千)

ダウン着る討入の日の老夫婦 五郎太(紀・亜・け)

綾取の橋手から手へ渡りゆく 孤舟(○五・○隆・啓)

母子乗る自転車疾走空っ風 健介(恵・弘・千)

雪被りお地藏さまは鼻っ欠け 恵洲(眞・天・け)

◎明日飛ぶと別れの葉書冬木立
新巻の生きし勇姿のまま届く
半纏の姐御みてこそ飾壳
鬼平と親しき仲の寒夜かな
横須賀線冬のカンナを揺さぶりぬ

堂哉(孤・隆・け)
昇(紀・健・堂)
亜也(千・び・天)
盛雄(紀・五・び)
びん(恵・〇啓・規)

二点

血圧の薬強めへ冬の雷
冬霞長く裾引く不二の山

忠彦(紀・健)
五郎太(た・浩)
孤舟(弘・〇恵)

日の鳩と日蔭の鳩と入れ替はる

◎電飾の少なき銀座社会鍋

弘子(眞・孤)

毛谷村もコロナの洗礼冬芝居

ただしげ(紀・け)

三日月や暮色にくつきり冬の星

全(龍・浩)

万両は老ひはげますや庭賑し

雅夫(紀・ゆ)

ひたぶるに百舌鳥の早贄(はやにえ)

恋近し啓子(紀・三)

ポーナスといふ語忘れて早や久し

亜也(規・天)

師走の荷大和運輸が取りに来る

天牛(忠・び)

眼に見へぬものの怖さよ去年今年

盛雄(紀・正)

三校でまだ直したし日向ぼこ

五郎太(紀・亜)

◎驚天動地疫禍の一年冬至風呂

弘子(紀・孤)

母乗りし愛車手放す師走かな

千恵(紀・隆)

手始めは母の遺品や年用意

堂哉(そ・弘)

年の瀬や無念夢想で湯につかる

ゆたか(規・盛)

見返りて佇む阿弥陀紅葉燃ゆ

啓子(紀・〇千)

黒革の手袋片手出てきたり

規雄(紀・龍)

寺領には廢道多し笹子鳴く

びん(紀・眞)

「寅さん」に癒ゆる師走や国病みぬ

全(紀・〇正)

庭になる不ぞろい三個柚子湯かな

けい子(紀・弘)

朔風に想起す越の立往生

亜也(紀・三)

一点

正月はコロナ気にせず迎えたし

そらお(昇)

待望のワクチン遅れ寒波来る

紀久男(〇盛)

籠り居に鳥のお通し実万両

全(盛)

おでん酒鴈治郎二代偲びをり

全(雅)

煤逃げの友と日向にコップ酒

全(健)

冬落暉わが旅立ちもかくあらむ

孤舟(紀)

声はなくショートメールの聖夜かな

五郎太(紀)

辞書のごとトリセツひろぐ年の暮

全(紀)

来る春の色にネイルを事始

ひろ子(紀)

友眠る八ヶ岳高原山眠る

健介(紀)

新海苔うく香り鼻腔にほんのりと

千恵(ゆ)

◎飛行機雲師走の空を一直線

ただしげ(孤)

冬の空十日の月もひっそりと

ただしげ(浩)

怠けると決めて師走のしづごころ 惠洲(亜)
 友二人別れ告げずや冬の星 堂哉(隆)
 戦地より妻への遺書や冬さるる
 ・ ・ ・ 戦没画学生展にて ・ ・ ・ 全(正)
 残されし母の手紙と日向ぼこ 全(隆)
 蠟梅や風吹くままに香り立つ ゆたか(た)
 冬ざれや港に泊す錆し船 全(○浩)
 籠り居の静かな師走迎へけり 昇(た)
 目覚むるや嚏(くさめ)の一二二三三 規雄(○三)
 寒暁の鴉かしまし塵芥 盛雄(紀)
 神経内科医よいお年をに笑みこぼれ 天牛(紀)
 白黒の若きジューパー師走の夜 全(雅)
 ◎シヨールしてそろりと歩く女学生 けい子(孤)
 久し振り浅草にぎおう三の酉 全(紀)

□ □ □ □ □ □ □ □

【句評】

十三点句

五グラムの宇宙土産や冬銀河 啓子

堂哉さん・日本人の快拳にばんざーい!!時事句として絶品。宇宙土産が良いですね。夏ごろ迄の解析で地球や宇宙の謎がどれだけ解明できるでしょうか?

昇さん・ ・ ・ 微細な砂と壮大な宇宙の対比が魅力。冬銀河が宇宙のロマンを掻き立てる。

天牛さん・ ・ ・ これからこうゆうことは何回おきるかわかりませんが二〇二〇年のいい記念にいただきます。

盛雄さん・ ・ ・ 明るい話題の少ない昨今、快拳であった。時事俳句の代表、中七が心地よい。

九点句

数え日の突堤に暮れ竿仕舞 びん

惠洲さん・ ・ ・ せわしない世間を横目の「煤逃げ」ですね、これは。

堂哉さん・ ・ ・ この日は釣れたのでしょうか?残念ながら魚籠は淋しげなのでは?仲間に声をかけることもなく、寂しく家路につくのでしょうか?

亜也さん・ ・ ・ 釣果はいざ知らず、突堤がぼつねんとした寂寥感を漂わせています。

盛雄さん・ ・ ・ 冬の海釣りは厳しいもの。チヌでも狙ったのでしょうか。『竿仕舞』に釣り人の気持ちが入ってゐる。坊主でなければ良いが。

五点句

とろとろと池に溶けゆく浮寝鳥 孤舟

弘子さん・ ・ ・ とろとろと 池に溶けゆくが発見ですね。

短か日や老い先短きこともふと 惠洲

堂哉さん・ ・ ・ 下五が良いですね。残り少なくなった人生のこの一年をコロナで汚されたことを誠に残念に思います。

行く年やコロナの先のうす明り ゆたか

忠彦さん・新しい年への希望に「うす明かり」の言葉がぴったりです。ワクチンであれ治療薬であれ希望を持ちたい。

理由無き樂觀主義や浮寝鳥 正明

規雄さん・ぶかぶかと水に浮かんで居眠りをしている浮寝鳥。羨ましい情景です。浮寝鳥を樂觀主義と捉えた所が面白いですね。只、浮寝鳥は夜良く働くそうです。

古稀の帯また締めぬまま年暮るる 啓子

紀久男・初芝居に和服を期待していたのですが残念でした。

孤舟さん・今年はコロナ禍の影響で、古稀のお祝いの会が中止となり、従って

正装の機会もなかった。加えてそろそろ終活の準備に取り掛かるうかと思いつつも果たせず、とうとう年末を迎えてしまった。

ただしげさん・古稀の際に新調した帯を締める機会もなく、今年も過ぎてゆく寂しさが出ている。亜也さん・祝の帯という古雅なところと、締める機会がなかったと解しての現代の生活の対比に深みを感じました。

籠り居や友の電話に救はるる 天牛

千恵さん・お籠り生活の中で友とはラインでのやり取りが多いのですが電話派の友人もいて気づくと一時間余りも喋り続けたりして結構楽しくほっとするので同感です。

下京にかくれ家ありき春星忌 亜也

紀久男・江戸時代から昭和まで下京には京都の旦那衆の妾宅が点在しており上手く句に詠まれております。

五郎太さん・蕪村はどこに住んでいたのか、六角通の煎餅屋も蕪村庵を名乗っていました。

浩さん・いかにも蕪村と京都の雰囲気がいい。

四点句

機嫌よき妻の鼻唄イヨマンテ（熊祭） 紀久男

恵洲さん・イヨマンテはこの場合歌の題なので季語にならないのかもしれないが、上機嫌の奥さんが熊祭の歌を口ずさぶのは光景として面白い。

堂哉さん・我が家でも鼻唄は出ますが、イヨマンテとは!!朝ドラ「エール」の影響でしょうか？

（紀久男・その通りです）

盛雄さん・自粛要請の多い世の中、鼻歌にイヨマンテとは嬉しい句が出来ました。

枝折戸の半ば開きて冬椿 孤舟

啓子さん・枝折戸が何故か半ば開いていて咲いている椿が見えるのでしょうか。普通のお宅かお寺さんか・藪椿でしょうか。竹久夢二の絵が浮かびました。

菌奔り老ひの巢ごもり寒すずめ 雅夫

紀久男・中七↓季重なりなので「籠り居」としたら如何でしょう。

今年またオンリー・ワンの聖夜かな 規雄

忠彦さん・オンリー・ワンは開き直りか寂しさか、大人の感覚。

龍平さん・寂しい？ いえいえ、これまでの甘辛人生を彫琢し終えた心境。新年も良い年になる

でしょう

隆さん・コロナ禍は、若者も老人も「オンリー・ワン」が普通であると徹底しました。そこから再び出発したいと思います。

煩惱の浮き沈み見ゆ柚子湯かな 盛雄

堂哉さん・閉ざされた日常の中、以前にもまし煩惱は毎日に生まれては消え、また浮かび出ます。湯船ですっかり流してしまいたいものです。

三点句

綾取の橋手から手へ渡りゆく 孤舟

五郎太さん・佳句がたくさんありましたが、コロナで何か殺伐とした年を終え、新しき年に移ることを願う、温かみをいただきました。

隆さん・「瞬間「橋手」とは何。「綾取の橋」と知り、いい材料だと思いました。指が動き続けているよう。「綾取の橋渡る指年暮るる」はいかがでしょうか。

喪の主へ賀状書けずにとだ黙禱 忠彦

健介さん・秋に無二の親友を亡くしました。

年賀状牛の貌まで付記を書き 忠彦

恵洲さん・追伸が牛の顔に架かってしまつて残念！

密なれど笑ひに行きたし師走寄席 忠彦

紀久男・寄席見物してから忘年会が当会の定番コースでした。

ダウン着る討入の日の老夫婦 五郎太

亜也さん・諧謔がいい味わいを出しています。

母子乗る自転車疾走空つ風 健介

恵洲さん・前後ろに子供を乗せて疾走する若い女性の命知らず。よくヒヤリとさせられます。

明日飛ぶと別れの葉書冬木立

・戦映画学生展にて 堂哉

隆さん・5年前、実家近く知覧特攻基地では日本中から集められた二十歳前後の若者が沖繩洋上の米艦を轟沈せんと飛び立ち不帰の人となりました。子供心に記憶は消えませんが。

横須賀線冬のカンナを揺さぶりぬ びん

恵洲さん・線路のすぐ近くにカンナの花、電車を通るたびに揺れている図。

啓子さん・カンナは今や都会ではなかなか見ない花となりました。遅く咲いた紅い花も寒そうです。旅に出たわけでもない横須賀線脇の景がセピア色の懐かしくも切ないような写真に見えるような。。。

新巻の生きし勇姿のまま届く 昇

堂哉さん・中七にひかれました。新巻のやり取りは昔に比べうんと少なくなりました。

鬼平と親しき仲の寒夜かな 盛雄

五郎太さん・長寿番組を楽しみに見て、昔行つた軍鶏鍋やを思う。

二点句

日の鳩と日陰の鳩と入れ替はる 孤舟

弘子さん・静かな景を詠まれてをり気持ち安らぎました。

恵洲さん・潜つたと思うと思わざるところに浮かびあがる日向と日陰のカイツブリの生態がよくわかる句、もしかして、同じカイツブリか。日の鳩、日陰の鳩の言い方が面白い。

三校でまだ直したし日向ぼこ 五郎太

紀久男・久しぶりの新著上梓。誤植なきよう校正に完璧を期すお気持ち伝わる好句。

紀久男・・・一寸オーバーな表現もうなずける。疫禍を「冬至風呂」で綺麗さっぱり洗い流したい
 気持ちを手く句に詠まれた。

三日月や暮色にくつきり冬の星 　　ただしげ

浩さん・・・ぼんやりとしたイメージの世界に「くつきり」と切り込むような音の鋭さが印象的

冬の空十日の月もひっそりと 　　ただしげ

浩さん・・・「ひっそりと」に静寂感あふれているのに好感。

母乗りし愛車手放す師走かな 　　千恵

隆さん・・・母の愛車ホンダ・カブを千キロ離れた田舎から持って都内で乗っております。母亡き後
 も母とともにドライブング。

怠けると決めて師走のしづこころ 　　恵洲

亜也さん・・・同感。しづこころという典雅な措辞がいい。

友二人別れ告げずや冬の星 　　堂哉

隆さん・・・大量の出会いと別れ。一期一会を大事にしたい。

残されし母の手紙と日向ぼこ 　　堂哉

隆さん・・・多死社会。よく見る日本の光景。母の手紙は愛情に満ちている。

冬ざれや港に泊す錆し船 　　ゆたか

浩さん・・・「錆 (rust)」と「寂しい」と兼ねているのかと勝手に解釈し、古いぼろ船と人生終盤
 の思いとが錯綜し物悲しい雰囲気共感。

年の瀬や無念夢想で湯につかる 　　ゆたか

盛雄さん・・・冬至風呂ですか。一年を顧みてゆったりと湯につかる至福の時、「無念夢想」が効
 きました。

万両は老ひはげますや庭賑し 　　雅夫

紀久男・・・広い庭に赤い実の万両がたわわ。それを啄みに渡り鳥などの冬の鳥が集まってくる
 仕合わせな光景を詠んだ。

見返りて佇む阿弥陀紅葉燃ゆ 　　啓子

千恵さん・・・永観堂の見返り阿弥陀様のことを詠まれたのかと。私も紅葉の季節にこの阿弥陀様を
 母と拝見した忘れられない思い出があります。珍しい阿弥陀様ですよ

目覚むるや嚏 (くさめ) の一つ二つ三つ 　　規雄

三恵さん・・・嚏を数えていることなどコミカルで具体的。目に浮かぶようです。

「寅さん」に癒ゆる師走や国病みぬ 　　びん

正明さん・・・こんな時ほど人間の胆力が試されるのでしょうか。

寺領には廃道多し笹子鳴く 　　びん

紀久男・・・冬ざれの鎌倉を見事に詠まれたベテランの句。

朔風に想起す越の立往生 　　亜也

紀久男・・・猛吹雪の北陸線で似た経験あり、懐かしい記憶を想起させてくれる句です。

一点句

籠り居に鳥のお通し実万両 　　紀久男

盛雄さん・・・実万両を鳥のお通しと詠んだセンスに好感。

※紀久男・・・原句は「く鳥のお返し・・・」ベランダに鳥の餌台・・・その鳥のお礼のお返し (実を食
 べて出した糞) 千両や南天、ピラカンサス等々に万両が一番目立ちます。

待望のワクチン遅れ寒波来る

紀久男

盛雄さん・国難に近い日々がストレートに伝わる佳句

冬落暉わが旅立ちもかくあらむ

孤舟

紀久男・会社勤めを辞め俳句一本で生きていく決意表明の句かと思われま

S S S S S S S S S S

【全体的感想・ご挨拶】

孤舟さん・(感想) 青葉会では表記は現代仮名遣いでも歴史的仮名遣いでもよいことになっているようです。

但し一句の中で「現代」と「歴史的」の混在は避けてください。

また「歴史的」の誤りが散見されます。注意しましょう。

例 老ひ ↓ 老い、見へぬ ↓ 見えぬ 等

堂哉さん・(新年のご挨拶)

皆様、新年おめでとうございます！日頃はご無沙汰ばかりで失礼しています。

今年はコロナが一段落し、安心して大阪から参加できることを願っています。今回は佳句ばかりで選句に大変

苦労しました。家内も巻き込んで苦しみながらの六句です。

引き続き皆様のご健吟を御祈りいたします。

【二月青葉会】

吉例初芝居絵見 正月五日(火) 歌舞伎座第一部 見物

初句会 一月二十八日(木) web句会と致します。

冬季雑詠 5句(締め切りは25日 27日に6句選句依頼の配信を予定)



令和二年十二月 青葉会会報

一 今回はコロナ禍収まるどころか益々勢いを増している緊迫の状況のためweb句会にしました。

今回の参加者は孤舟選者ら8名 選句だけの龍平さんら8名。

ご覧のように啓子さんがダントツの高得点でした。次点は超ベテランのびんさん。

二 関係者近詠

植ゑし吾に似て唐辛子いと辛し 眞希子 秋満月吾に添ふ影の無き久し 陽充

結婚せむと台風圏へ旅立ちぬ 全 あぶれ蚊に去なされし吾を肯はむ 全

調律を怠り鍵盤指に冷ゆ 全 めをと箸消えて幾年とろろ汁 全

含羞みつ献金当番秋桜 全 落ちてゆく鮎に全山響動もせり 全

吾亦紅聖画描きてサインせず・絵画の師 全 盛装を解かぬ筑波峰冬近し 全

楽鳴らぬ音楽堂や曼殊沙華 弘子 全米オーブン優勝の大坂なおみ 全

望月の回転木馬金の鞍 全 テニスの秋黒人名乗る日本女子 紀久男

山から陽昇る母郷よ今年米 全 大阪の芝居噺「本能寺」 全

足と腰構へ新米受け取りぬ 全 見得仕草芝居がかりの秋高座 全

銀杏降る半襟白き江戸訛

全

行く気せぬ掛け声禁止の顔見世は

全

土手高き原発岬に小鳥来る

全

——「森の座」一月号——

数珠を手に来し方偲ぶ黒コート

盛雄

海光る志摩の船宿牡蠣尽くし

紀久男

籠る日のポインセチアの光かな

全

月冴えて土星木星近ふせり

全

凍てる夜光る宇宙の玉手箱

健介

やり切った笑み初出場で勝つ女子フィギア

全

音もなく重なる齡冬銀河

全

——きさらぎ句会 十二月——

三 頂いた年賀状より勝手ながら抄出してみました。

迎春の白砂引かるる鉢の松

弘子

参道の造花めでたきお元日

川崎雅子

野に放つ子等の鬱憤羊雲

植田 滋

四 令和3年1月号「爽樹集」掲載の孤舟さんの5句をご紹介します。

渺茫の海を溢るる大夕焼

山の湖鏡風して月今宵

舟屋口洗ふ波音星月夜

秋天へレースの鳩の放たるる

夜這星ひとつ走りて漁火に

令和三年一月八日

紀久男 記